

シンポジウムを終えて

当日のアンケートより

司会 高石 恭子

第二回のシンポジウム開催にあたっては、第一回のような事前の申込制をとらなかつたため、当日の参加人数、雰囲気などは、十分予測のつかないところで準備が進められた。入室できない来場者が出た場合に備えて、隣室にモニタースクリーンも用意したが、幸い主会場に全員座っていたことができた。休日で、長時間にわたつたにもかかわらず、最後までほとんどの参加者がフロアに残り、シンポジストの発言に熱心に耳を傾けておられたことが印象的であった。

当日、参加者から提出されたアンケートは一六四通に上つた。シンポジウムの内容、運営について書いていただいた、多くの忌憚ない感想やご意見をここに要約し、ご報告することとで、今回のシンポジウム開催についてのまとめと反省に代えたい。

まず全体としては、第一部・二部ともに概ね好評であった。参加者には、助産・育児支援の仕事に直接携わっておられる方も多かったようで、自然分娩、母子同室、母乳育児等、周産期をめぐる現場の最先端の議論は、日常の仕事に直結して

生かせる啓発と力強い励ましになったという感謝の言葉が目立った。また、これから出産期を迎える娘を連れて来場したという年配の女性を含め、こういった、日常場面では語り合ったり触れることの難しい、いのちの誕生と育みの現実について、若い年代の人びとに多く伝える機会をもつ意義を評価した一般の年長者の方も少なくなかつた。これは、企画者の意図したところというよりは、各シンポジストの熱意の伝わつた結果と言つべきであろう。

一方、若い年代の参加者の反応は、年長者のそれとは多少色合いが異なつていた。シンポジウムで提示されたスライド映像を自らの近い将来に重ね合わせ、新鮮な感動を得るとともに勇気づけられたと述べる方もあつたが、出産・育児の身近な体験がなく、むしろ「母性」についての学術的な議論の展開を期待して参加した学生のなかには、一部、不満の意見もあつた。第二部のシンポジウムで、周産期、医学に偏るのではなく、フェミニズムなど、他分野のシンポジストを交えたほうが良かった、討論の時間が少なかつた、というご指摘である。時間の関係で十分にご発言いただけなかつた指定討論の先生方には、学術フロンティア事業の最終年度に出版が予定されている論文集で、改めて登場をお願いできればと思つている。

それら数点のご批判を鑑みた上で、第一部の基調講演で総論を語つていただき、第二部のシンポジウムで周産期に焦点を絞るといふ今回の構成は、それなりの成功を収めたのではないかという印象をもつた。何と云つても、現場実践から語

られる言葉と提示される映像には迫力があり、直接的に五感を通して参加者を揺さぶってくる。その体験を言語化し（ある参加者は「言葉化し、物語る」と書いておられた）、振り返って自分のものとして消化していく過程に、基調講演で示された思考の枠組が有効に作用したと思われるからである。

もちろん、不足の点は他にも多くあったとは思いますが、それは次回のシンポジウムへの課題として引き継いでいきたい。ご意見・ご感想を寄せてくださった参加者の皆様には、今後本学のフロンティア事業活動に、ご理解とご協力をお願いする次第である。